

DOLL FORUM JAPAN



四谷 シモン
L'AMOUR PRESENT

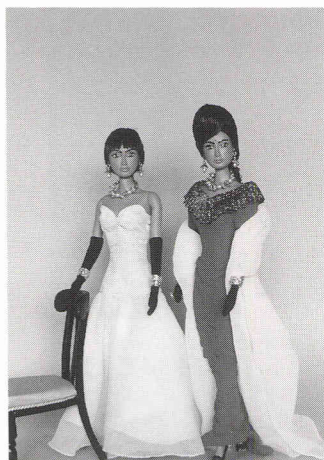
DOLL FORUM JAPAN
ドール・フォーラム・ジャパン
AUGUST 1995 Vol.6

NEWS



天野可淡人形作品集 CD-ROM 化

人形界に衝撃を与え、その才能を多くの人に惜しまれながら夭折した人形作家、天野可淡。その作品集のCD-ROMが去る6月8日に発売され、コンピューターの画面でも鑑賞できるようになった。吉田良一氏の写真の美しさに、松崎雄一氏の音楽が加わり、立体的にその世界が構成される。3980円(税込み)
発売 シンフォレスト ☎03-3440-6108



エス・ダブリュー・ジャパンより 1995年秋のピーボーイの新作

ソラヤ

パリ在住の奇才アーティスト、ピーボーイの新作は、サイキッカー人間の持つ第六感を象徴し、インドのエキゾティシズムとパリ・ファッションの魅惑を見事に融合させたポーセレンドール。エキゾチックでミステリアスな風貌に、本物のオートクチュール・ファブリックを使用したコスチューム。今秋、エス・ダブリュー・ジャパンが世界に向けて発売。26cm。13万円から。

問合先 エス・ダブリュー・ジャパン
☎03-5481-2025 fax 03-3419-8606

DOLL FORUM JAPAN

AUGUST 1995 VOL.6

CONTENTS

- 表紙 L'AMOUR PRESENT 制作 四谷シモン
- インフォメーション・スケジュール 2・3
- 近況報告 4・5
 - 水澄美恵子・大島和代
- 人形つれづれ 第6回 職人さんの創作人形 6
 - 文・福島弘太郎
- レポート 日本人形玩具学会公開行事 7
- レポート サンタフェ・ドールフェスティバル 8
- ゲイルからの手紙 第4回 トイフェアを持ち帰る 9
 - 文・ゲイル・エニド・ジマー
- インタビュー 四谷シモン 10-15
 - インタビュー・文 小川千恵子
- ピンスポット とおりゃんせ(桐生) 16
- お化け屋敷店長日記 第2回 立体への 16
 - イラスト・文 摩宮ピノン
- rom overseas ジュディス・クラウィッター 17
- REVIEW 展覧会より 18-20
 - ゆすら・安藤早苗+中村みどり・赤川政由
 - 山口景子・早瀬康司・ホリヒロシ人形教室、
 - せ・ら〜るチャリティー人形展、
 - 世界の人形展(若月まり子)、奈里多究星、
 - 田畑恵美子教室展、粧順、兒玉幸治写真展
 - トピックス 昔人形青山東京コレクション
- 人形芸術の世界展 21
- 教室案内 22
- LETTERS DFJ 活動報告 編集後記 23

ドール・フォーラム・ジャパン

1995年8月25日

ドール・フォーラム・ジャパン事務局発行

ドール・フォーラム・ジャパンは日本のアーティストドールを支援するためにつくられた情報誌「ドール・フォーラム・ジャパン」の購読会員による非営利の組織で、購読会費とユーラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています。

SCHEDULE & INFORMATION

展覧会

●せ・ら〜る

8月は移転のためお休みします

●昔人形青山 (10月より昔人形館と改称します)

〒603 京都市北区北大路室町南入ル小山東大野町69番地

074-415-1477 (11:00~19:00)

11月1日~12日 たがわまさき 作品展

11月25日~12月5日 飯塚誠太郎 創作人形展

12月6日~14日 河野滋子 創作人形展

12月16日~25日 白藤千枝 創作人形展

☆創作人形アピールボックス

11月1日~96年1月31日 楠田アヤ子・山吉由利子・岡馬勲

●ギャラリー、アピールボックス共に予約受付中

◆せ・ら〜るが移転

7月に新宿PEPEを退店したせ・ら〜るが9月12日に原宿で新規オープンをする。

移転先は：渋谷区千駄ヶ谷3丁目52-3 原宿黒川ビル3F (原宿駅から徒歩5分)

開店までの連絡先：(株)アイ・エス・アイ せ・ら〜る準備室 金田 河西

TEL 03-3340-4468

◆写真集

田畑恵美子作品集「クレイドール 愛しき仲間達」

REVIEWでも紹介した田畑さんの作品集。田畑さんの創意と工夫の集大成といえる個展を、昨年度主催で一ヶ月のロングランで開催。これを記念しての出版。会場となった重要文化財の桐生明治館の空間で、人形が息づいていた様子が蘇る。

3000円

問合先 田畑

〒376 桐生市東2-5-4

0277-44-9686



◆人形用かつらをオーダーメイドで

名古屋の岩月(がんげつ)では、人形用のかつらを注文に応じて制作してくれる。希望のスタイルをイラストでファックスや郵便で送り注文するシステム。素材は人毛(黒、茶)、絹、合繊、モヘア。また、かつらの他に国産のグラスアイも扱っている。色は茶、ブルー、グレーの三色。

連絡先 合資会社 岩月人形

〒463 名古屋市中山区大牧町3-25

tel 052 793 2811 fax 052 793 2812

◆DFJワークショップ

サーニットー日集中講習会

10月15・22・29日(いずれも日曜日)

海外でサーニットを使いプロとして活躍されている黒川早恵さんを講師に迎える貴重な講習会です。詳細は同封の案内書をご覧ください。

問合せはDFJ事務局かミワドールまで09-3415-3800

●蘇る江戸の賑わい 中西京子和紙人形の世界

10月18日(水)~24日(火)

大阪・心斎橋大丸7F 特設会場

主催 毎日新聞社 後援 NHK, 大阪上方演芸資料館

8種類のジオラマを含む総数2500体を越える人形で構成した「中西京子と紙人形の世界」の総集展。にぎやかでユーモラスな江戸の庶民の暮らしの姿を劇的に再現



●田原浩 人形展

9月18日(月)~23日(土)

GALLERY OGATA (ギャラリー緒方)

11:00~19:00

(最終日16:30)

東京都中央区銀座6-7-12

滝山町ビル1F

☎03-3572-4727

エコール・ド・シモン所属の田原氏の2度目の個展



●長谷川裕子 創作人形展

10月15日~10月25日

瀬戸内海汽船 星ビル広島店

(11:00~19:00)

広島市中区紙屋町1-6-9

☎082-249-1941



●中桐育代 心まかせの人形個展

10月23日~28日

ギャラリー游翠

(11:00~18:00)

大阪府茨木市舟木町1-26

☎0726-38-3300



●佐々木芙美子と仲間達展

11月4日(土)~9日(木)*火曜休館日

東京都八王子駅ビルホール

紙粘土で民族的なテーマを得意とする佐々木芙美子の教室展 百点ほどを展示

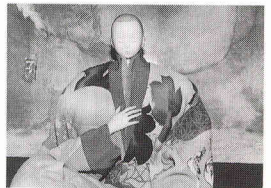
●古田文 人形展

11月19日(日)~25日(土)

GALLERY OGATA (ギャラリー緒方)

*田原浩個展欄参照

よねやまりゅう、高橋富子に師事した作者の布やビスクによる人形



●やまと鳳 関東教室展

11月21日~26日

銀座4丁目ロイヤル美術館(千疋屋ビル7・8階)

「はな」をテーマにした中西京子の和紙人形教室の展覧会

●小沢幹子 人形展

11月27日(月)~12月2日(土)

ギャラリースペース パウゼ

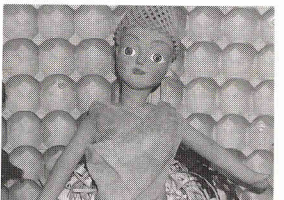
(11:00~19:00)

東京都新宿区市谷船河原町9

(JR・地下鉄飯田橋駅下車)

☎03-3269-5007

エコール・ド・シモン門下生、プリミティブな個性が魅力

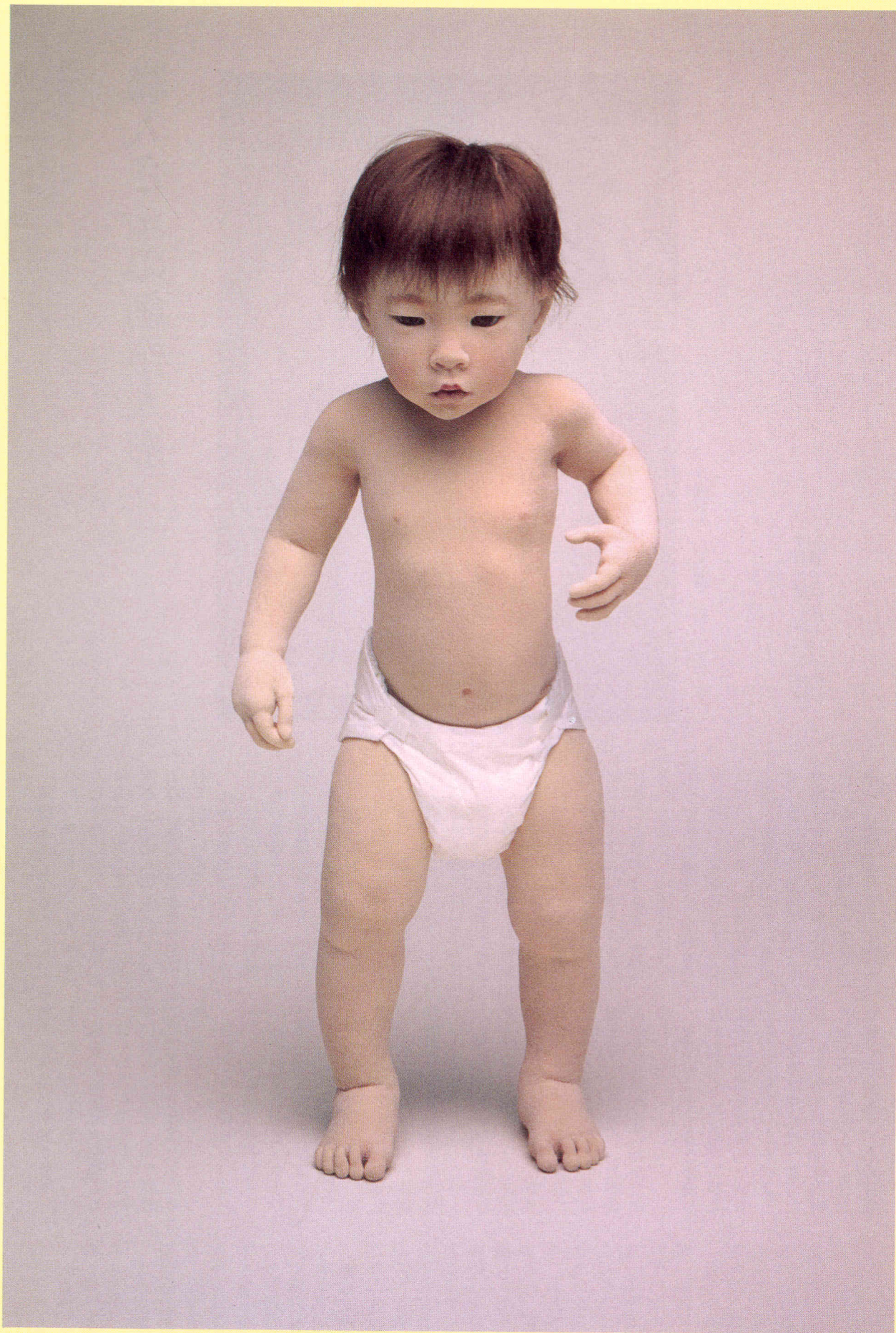




水澄美恵子

かんざし売り 素材 麻ひも、石塑、和紙

江戸庶民をテーマに8月2日から28日まで東京都広尾のギャラリー一句にて個展を開催



大島和代

最初の一步 37cm 素材 布、綿

6月に行われたパリでのオークションでの現代人形の部門では「最初の一步」をはじめとする大島さんの作品だけが紹介された

人形つれづれ

連載第6回

職人さんの創作人形



写真協力 西荻窪「ベビイドール」

福島弘太郎

市松人形（やまと人形）はいうまでもなく江戸期より日本を代表する人形の一種ですが、その亜種に属する「自由人形」というものは一般的にはあまり知られていないようです。

主流の多くは昭和八年から十二年頃の限られた時期のものがほとんどで、三百体余り修理の仕事をしても今までに数体しか出会っていません。しかしそれらは皆それぞれにチャージングで、よく記憶に残っています。

「自由人形」はいちまさんとよく似てはいますが、多くの場合上腕部と大腿部も桐塑で出来ており、抱き人形の要素を強く残しながら、球体関節のようなジョイントによってポーズをつけることもできます。また変わったところでは市松のように布で繋がれながら、中に通った真鍮のボールとスプリングで、好きな角度に固定できるものもあります。髪の毛はおかつばですが幾分ショートで肩につくかつかない程度のもので、多く、正座ができるように

膝の動き角が調節されているものもあります。

個別には屋号や商標名もついているのですが、この手のものは皆まとめて通称「自由人形」と呼ばれているのです。

何故そう呼ばれているのか、一つには仕草が好みにつけられることと、もうひとつには和装でも洋装でもどちらにも着せ替えられる、ふたつの意味で「自由」であることかららしいのですが、いつ頃からかその名称が固定したのかは定かではありません。

おそらく生活が着物から洋装に徐々に変わり、また西洋人形からの影響も受けだした時代の過渡期に現れたのでしょう。いうなれば職人さんの作り出した創作人形とも捉えることができます。

旧来のスタイルを踏襲しながらもそこに時代の要求する方向性を積極的に取り込もうとしているかのような不安定な様式は、まさに新しい止揚への脱皮を模索する、別な意味での「自由」を感じさせます。この成熟

しきらない危なげな感じはそれ自体、この人形に当時の「時」を刻みつけているようです。

人形には工芸的な意味での技術の完成度が要求されることは当然ですが、創作人形ではさらにそこに作り手の顔も見え隠れします。この同時代性なくしては人形の魅力もきつと半減してしまうでしょう。

創作人形と呼ばれるものが誕生してから久しく経ち、その中には工芸として本流を担うようになったものもあります。また自ら創作に携わる人も増え、技術的に優れたものが多くなってきました。創作人形も年をとってきたのかもしれません。そこでそろそろ次のあやふやな一歩がどこかで踏み出されていかと思うのです。が、如何でしょう。

仕事がらくらく骨董屋さんで、久しぶりに出会った自由人形になぜか照れくさいような思いを感じていました。
（人形作家）

人形の国のアーティスト

6月18日 横浜人形の家

去る6月17日と18日に、横浜人形の家において、日本人形玩具学会の大会をかねた公開行事が開催された。17日にはメイン・テーマに基づき、人形研究において著名な北村哲郎氏による基調講演、人間国宝の市橋としこさん、TV人形劇「平家物語」制作の川本喜八郎氏らによる対談が行われた。

18日には「人形の国のアーティスト」と題し、リカ・カルチャーの研究で知られる増淵宗一氏とDFJの小川の司会で、パネリストの四谷シモン氏、芹川英子さん、後藤朝子さん、渡辺純子さん、福島弘太郎氏、関原紫光さんの面々が現代創作人形をめぐる会場も交え思い思いに発言、3時間という長丁場であったが、パネリストや会場の人々の世代、立場が異なり、それぞれが話しくしてもしつこくない感で終了した。また、関連展示が同会場の多目的室と隣接するメルバルクギャラリーにおいて開催された。今回のシンポジウムでは更に論議を深めたいテーマが多く、今後の日本の人形の交流を目指し、再びこのような意見交換が活発にされることが望まれる。ここでは、簡単に、パネリスト各氏の紹介を含め、印象に残る発言を拾ってみた。

渡辺純子（人形美術研究家・エス・タブリユー・ジャパン代表）

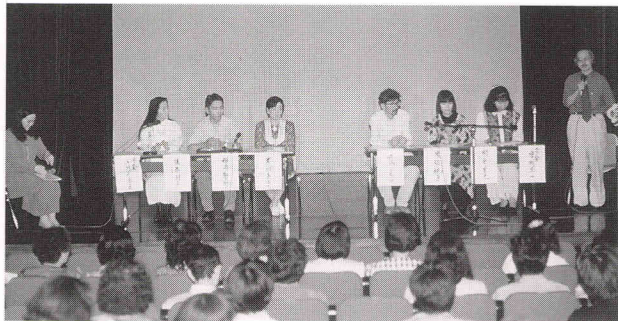
本日の芸術とはエネルギーを循環させるメディアであると考えます。そのような芸術は人間までも変えるような不思議な力を持つています。人形が芸術になり得るか、ということですが、人形もオブジェであり、この意味で宇宙のエネルギーを循環させるメディアであれば、ジャンルを問わず、アートになるのです。人形は作った側だけでなく、所有する人からも魂Ⅱエネルギーが注ぎ込まれ循環する特殊なメディアということができます。

後藤朝子（人形作家・DFJ五号で紹介）

私はインスタレーションといって、群像で空間自体を変えていくという発表をしているんですけども、現代美術的な造形表現になりきれないところに、人間と密接な関わりを持っているヒトガタから生まれた人形の不思議な魅力を、どうしても捨てきれないんです。人形とファインアートがどこかが違うというのは、私自身の解釈では、作っている者は皆、人形ができた呪術的なものを捨てきれないし、そこが一番人形の魅力だと感じているんですが。

芹川英子（伝統工芸会 人形部会長）

工芸ということで、人形が用の美、ということに限定されてしまうと、そうじゃないんですね。美術にはいつやうなですね。工芸、というよりも、絵画とか彫刻とか。鑑賞的なものなのでそういったものに入ってしまうんですが、じゃあ、絵とか彫刻と同じか、というと、ちよつと違うんですね。じゃあ



工芸というのは磨き上げられた技術の冴えを土台にしていなければ工芸の中に入らないのじゃないかと思えます。他の分野の方などは非常に技術の鍛錬の後の作品を出してらっしゃいます。そこへいくと、それに対抗するには伝統的な技をある程度ふまえた上の作品でありたいと思っています。

関原紫光（京人形師）

私の父は、ああいいう人形（伝統的な京人形）しか作れないんです。桐の木を削って針金を通して、綿を巻いて、昔の着物を素材にして、ああいいう人形が好きで好きで、こういうやり方でこういう人形を作るのが好きで仕方がないんです。作るたびにものついているものというのを求めていつていると思えます。そういう生き方のような気がします。素材とか、本質的にはその人自身の問題と思えます。伝統だからあかんのや、創作やからあかんのや、という気持ちではなくて、お互いを受け入れる気持ちでやっていったら、もつとこういう人形の世界は、楽しくなるんじゃないかという気がします。

四谷シモン（人形作家）

先ほどスライドを見てまして（シンポジウム初頭に小川がスライドで若手三〇人あまりの作品を紹介）、私が十七・八

の頃朝日新聞の現代人形美術展というものがあつたんですけども、あの頃とちよつともかわつてないな、と。何がかわつていないかというと、材料などには多少の変化はあるけれども、精神構造というのか、何も望んでいないんだな、ということが分かつたんですね。これらの人たちの作品で、世の中の人たちに衝撃波をドーンとぶつけることが出来るでしょうか？大問題だと思えます。人形というのは命がけでしなくておさまっちゃうようなものがある。もつと新しい、エネルギーがあつて、いい作品がでてこなければ駄目だと思えます。

福島弘太郎（人形作家）

私個人としては、人形自体の芸術性としては、あまり興味がわかない事なんですけれど、一番納得がいくのは、人形って「物」なんです。創作ものの著しい欠点というのは、百ある器の容量を百まで全部だしちゃう、あるいはそれを越えて作る側がメッセージを伝えようと必要以上にエネルギーを込めすぎたり。自分自身も含めて、創作人形というのは自分自身に甘い部分があるんですよ。表現的ではあるけど、独りよがりであつたりとか、買つてくださるお客様に対しての価格的な問題であるとか。

（敬称略）



「大理石風の青いマドンナ」 ポール・クレール&ピーター・コウ



植木房子



「ジョージア・オキーフ」 リチャード&ジョディ・クリーガー

サンタ・フェ ドールフェスティバル

4月21・22日

ピーター・コウ

サンタフェ・ドールフェスティバルは4月21日と22日に、アメリカのニューメキシコ州で開催された。このフェスティバルでは、有名なギャラリイでの一体もの展示会、二日間わたるドール・ショー、グロバル・ドール・ソサエティによる一般公開のコンテストとワークショップ、子どものためのティーパーティーが行われた。また他に人形作家のヒルデガルド・グンツェルや鑑定家のフランソワ・テメールの講義も行われ、人気を集めた。フェスティバルは世界中から参加した作家、ディーラー、メディア、コレクターなどからの喝采によるにぎやかなファンファーレで祝福された。一つの展示会にこれだけの数の国際的な人形作家が展示するのは今までなかったことだ。多くの参加者が、この展示会が今後世界で最も重要なドールアートのイベントになるだろうと確信している。

アンネット・ヒムステッドはサンタフェ幼児虐待防止委員会のチャリティーのために四体の素晴らしい作品を寄付した。スウィーニー・センターで行われた二日間のドールショーには、アメリカ、ドイツ、ロシア、フランス、オーストラリア、イギリス、オランダ、スイス、そして日本から七十人の作家が参加、高水準の作品が集まった。日本からは植木房子さんが参加、植木さんのオートバイの作品は好評を博した。ユラシア・ドールズの小川千恵子さんの呼びかけにより作品のみ参加した高橋操さんの作品は、完成度が高く、かつユーモアのある傑作。日本人は、ドールアートの世界で伝えるべきこ

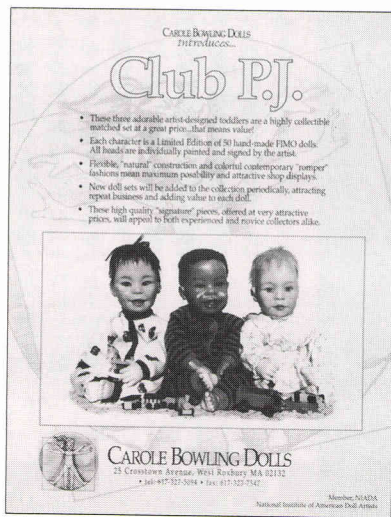
とが沢山あるから、このような大事な展示会では多くの参加が望まれる。雪の嵐があつたかと思うと日が射したりと、奇妙な天候の変化にもかかわらず、フェスティバルには地元多くの観衆とディーラーが詰めかけた。

エディス・ランバート・ギャラリイでの一体ものの展示会は、主に美術品のコレクターより、称賛を浴び、各批評も一般的な反応も好評だった。これは、ドールアートが美術市場の主流に交わっていくべきだと考える人々にとって、心強い結果であつた。もつとも注目を浴びた作品はポール・クレールの「大理石風の青いマドンナ」だった。これは革新的な傑作で息をのむほど美しい。ヒルデガルド・グンツェルの翼のついた天使は多くの人の心を虜にした。ウタ・ブラウザーの「ドラック・クイーン」は彼女の名を不動のものにするほどの作品(ヘレン・キッシュの陶器のインディアンは心に深く刻み込まれる。マジャ・ウィック・パチエラーの絶妙な傑作『悪魔に打ち勝つ真実』は、ウィリアム・ワイリー賞を受賞、人気により多くの投票を得た。リチャードとジョディ・クリーガーによるサンタフェ在住の女流画家の肖像「ジョージア・オキーフ」は、ひととき目を引く傑作で深く印象に残った。

今回の結果により、来年も同地で同時にフェスティバルを開催することになった。名称を「サンタフェ・ドール・アート」と改称し、エクセレンスのシンポジウムというテーマで開催される予定で、既に準備にとりかかっている。

「トイ・フェア」をもって帰る

ゲイル・エニド・ジマー



ニアダアーティストのバウリングのチラシ。白黒の片面印刷だけど、低コストでセンス良く、知りたい情報の全てが載っている。

毎年ニューヨークでは、二つのトイ・フェアがある。ひとつはトイ・セクターや、ジャビッツ・セクターで直接見るもの。前回報告したように、それはエクサイティングでもあり、とっても体力を消耗するもので、私でも普通、1〜2日かかってしまう。(私にはプレスの特権があるけれど、トイ・フェアは商談会だから、入場するのにビジネスの証明書類の提出を求められる。)

それから、私が家を持って帰るトイ・フェアがある。私はそれを見て、何十枚もとった写真が誰のものであるか確認をする。プレス・ルームでは有益な情報が手にはいるのだが、多くは大企業の高価なカタログであり、一体ものや限定品を手に入れようとか、非売品でも新しい作品がみたいと思うコレクターや私の記事を読んでもくれる人、そして私が喜びそうな「弱小の人々」からのものはあまりない。結局、量産品を扱う小売業者は、トイ・フェアがオーブンするずっと前からコレクター向けの刊行物で、何ページにもわたる広告から

知りたい情報を得ているのだ。小売業者は既に企業から「コレクター向けの作品」の注文の情報をもらっているし、発表を待たずにその年の新作の発送を待つていたりする。人形が届く前に、お得意の顧客に声をかけておくなんてこともよくあることだ。

だから驚くような発見はない。だが最近まではごく少量の限定品やユニークな作品の広告を見るなんてことはなかったことなのだ。大手の人形誌出版社はそういうな広告を出す分に見合うほどの読者を抱えているし、時にはそれは記事になりかわったりする。だがそういう人形はトイ・フェアが終わるまで誌面に登場するということとは滅多にない。

一体ものの作品を作る作家にとっては、広報の媒体に売り込むことは特に難しい。一人より多くの人が特定の人形を気に入るかもしれないし、したくもないのにオリジナルとそっくりの複製を作れとかいわれ、結局オリジナルの作品の買い手にとって不公平な結果をもたらすことになりかねないからだ。また、自分の作品を代表する作品だけでバイヤーに作品を見せるとき

の危険は、バイヤーはその作品そのものを欲しがることだ。一体ものの作品で成功するバイヤーは、一番最初に作家にコンタクトをとり、経済的に作家に対し義務を果たすし、そう願うバイヤーである。これは常識みたいなものだが、競合しあうバイヤーのために、作家は難しい状況に置かれている。

いつも私は、紙質や色のバラエティーに富んだ何十枚もの名詞を持ち帰る。その中のいくつかは、インクの部分が盛り上がっていたり、大きなサイズで人形の写真がついていたりする。私は特に個性的なロゴが好きだ。でも多くのものは単調で見栄えがしない。名詞の利点は、整理しやすいし、カタログより長く持つてやすいことだ。

標準サイズで二つ折りの名詞は、内側に説明を多く入れることが出来る。これの変形は、ドイツのスザンヌ・フィスターのグリーンディングカードだった。彼女はカードの表面の印刷されたロゴの上に自作のクローズアップの写真を糊付けした。内側には、人形のサイズや住所、電話番号と言った基本的な情報が印刷されてあった。目を引くようなデザインは広報物を見るのは楽しい。だがジャーナリストとしては、内容の情報が重要なのであって、それは購入を考えている業者にとっても同じことである。名詞のサイズの中でも、混乱さえしなければ、名前や住所の他にもっと情報を伝えることは出来る。ピラやカタログや冊子に印刷された鮮明な写真は重要な視覚情報であり、多くの出品者の中からオリジナルのスタイルを目立たせるハイライトでもある。これらのほかない資料を記録として保存しようとか本気で思っているわけではないのだが、私はこれらの資料を毎年ためていくことで、楽しいイベントを思い出し、素材とテーマの流行を探り出し、アーティスト・ドールの市場の発展を実際に表示することが出来るのである。

役者や詩人としての顔も持つ奇才の人形作家、四谷シモン。十代にして既存の人形に飽きたらなかったその早熟な感性は、独自のエロティックで幻想的な世界を作り出し、遊澤龍彦ら多くの文学者や詩人、芸術家などに愛された。また彼の仕事がいかに多くの後進の人形作家に影響を与え、人形への意識を変えてきたかは言うまでもない。

四谷シモン

愛の不在

小川 インタビューを始めるにあたり、失礼でない呼び方はどんな呼び方でしょうか？ 四谷先生とか？

四谷 かっこいいね(笑)。ここではもう、シモンでいいですよ。

小川 ではお言葉に甘えさせていただきます。シモンさんは、人形をおつくりになったのは、小学生の頃から聞いていますか？

四谷 そうですね。本当に小さな頃から絵とか表現することって好きでしたから。小学校四年の時に、新聞紙をちぎって、メリケン粉で紙粘土を作ってお面を作りました。それが立体物を作った一番最初ですね。四コマ漫画のふきだしに人形の作り方が説明してあって、そのとおりに作ったんですよ。笛吹き童子にでてるしゃれこうべのお面ですね。それを屋根の上なんかかわかしながら作った記憶がありますね。それから一一、一二歳のころにはぬいぐるみ人形を作っていたんです。当時は果物屋さんについて木毛をいっぱいもらって、天然木綿で手で縫って足やボディを作るっていうところから始まったんです。いつも人形作っていましたね。頭の中にそういうものがいっぱいあって。

小川 川崎ブッペさんの本を見ながらお作りになったとおっしゃっていますね。

四谷 雄鶏社からでていた人形の本などを見て、川崎ブッペさんのバレーの大きな人形のようなものに憧れていましたね。どうしてそこに目がいったん

でしようね。非常に運命的ですけども。

小川 小さい頃お母さんが家をあげられることが多くて、それでよく人形遊びをなさっていたって……。

四谷 あ、それはあります。それは後で考えて、自分なりに分析しますからね。結局「愛の不在」と言いますからね。両親が外で働いていたものだから、代償行為として、親はいつも人形は与えてくれていたんですね。親なりに寂しくならないように人の形をした物を、という考えがあったのかもしれないですけども。そういうものが一つの要因ではあったかもしれない。

人類最初の人形

四谷 まあ、たまたま人形ということですが、一般的な解釈ですと、他の絵のような表現に比べると人形？ と思いますよね。なんとなくね。

小川 それに人形ってとても嫌いな人がいますからね。

四谷 そうですね。だからなんなんでしょうね。その部分については、僕は謎のまま残しておいてよいような気がしますけれど。

小川 人形が嫌いだって言う人の反応を見てみると、それは本当に好きの裏返しだなんて気がしますね。

四谷 裏返しです。同じものを見て、片方の人は狂喜するくらい、「可愛いい！」「っていうけど、もう一人は「きもちわるい！」。人形ってそういうものなんだと思います。そこがとっても大事なポイントという気がします。まあ、人形が不思議というか……。考えようによっちゃ、何で人類って人形なの

か、と思うわけです。僕は、こういう仕事(教室)をしますが、どんな人でも、どんな同じ教材をやっているも、絶対自分に似るんです。これは不思議。顔が丸い人が四角い人形を作っても、どうしても似るんですよ。それくらい極端なものなんです。これは、人間とは本来ナルシズムの生き物であるという証ですけどね。僕は、人類最初の人形っていうのはね、きつと雨が降って水がたまったときに、ふと見た「我」、それが最初じゃないかな、と思うんです。具体的形という以前の問題です。表現以前の問題で、人類が誕生して一番最初に見た自分の顔、それを見たときに、ふと、「何？」「と感じた不思議なもの。人形というのはそういうところでもかわり合いが深いと思いますね。極論ですけどね。それから副葬品、埋葬品の歴史が始まるわけですが、それ以前の話ですね。

玩具でも、工芸でも、飾りものでもなく

四谷 僕は一番困ったことは、人形を作っているというところ、「へー、男の人が人形作っている」と言われたことと、「フランス人形ですか、日本人形ですか？」と言われたこと、僕は昔これに攻められたんですよ。人形というとこの二つが大きな冠のようにありましたからね。(笑) 十代の頃でしたけれど、その当時、日展の工芸部に伝統工芸とか朝日新聞の人形の現代人形美術展とかもありましたが、だけどそうじゃない、うまくいえないんだけれど、「ただ、何故人形で」という事を



言っていましたね。飾りもの
じゃなくてそうじゃないもの、
それは自分でも わからな
い……今でもわからないこと
が続いているわけですね。

小川 私、今でもそれは感じ
ます。自分の仕事を説明するの
に苦労します。困ったもんで
すね。(笑)

四谷 それを、そうじゃなく
て、世の中にはこういうものが
あるんだと突破口を開く運動
のような格好になるような気が
しますけどね。戦前でだけれど
今は人間国宝といわれているよ
うな人たちが若いときは、運動
したんです。もちろん工芸
の領域になりますけれどね。文
展(今の日展)というようなと
ころを目指して大変努力した
と思いますよ。今よりもずっと
大変だったんじゃないですか。
それでね、当時の人たちが目指
した人形工芸という意味のよう
なものは、すでに僕たちの時
代では確立しているわけです。
前に仙台でやった「美術の国
の人形たち」という展覧会があ
りましたけれど、美術館で人形
が工芸品としての扱いではな
くって、若い学芸員の人たち
が絵画や彫刻と並ぶ領域として
の意識を持ってきてくれた
ということですね。でも、まだ
まだですけれどね。それに匹敵
する作品を作る人間がそろわ
なくでは駄目です。大変な
パワーがいります。でも、それ

は、今なんです。今、戦前の
人たちがそういうところに向
かったのと同じく、今僕たちは
そういう風に向かっているとい
いますか。僕は、自分の目的
という言い方はおかしいですけ
れど、工芸品としてではなく、
精神面の領域のまで僕にとつて
は人形なわけですが、いつか美
術館に、と思っていましたね。
それで、徳島の県立近代美術館
が買ってくれたんです。その時
はうれしかったですね。やつ
たぞ!という気持ちで。そうい
うことがニュースになって伝わ
れば、誰かしらが見てよければ
またやってくれます。僕はそう
やって全力投球で自意識過剰
でやってきましたから(笑)。
ただ、それがなかなか続かない
んです。続かないっていう
ことはたとえば、うちにも展覧
会の葉書がいっぱい来ます。と
ても一生懸命やっているけど、
それは私的な領域の問題になり
ますが今一つ、離脱しているも
のがない。たとえば僕は工芸品
とかそういう領域のものとは違
うんです。だから僕は描らいてい
る存在かなって思うんです。な
もちろん僕は人形の世界から
入ってきた人間だけれど、目を
つけてくれるのはそういうところ
なのかなって。べつたりと手工
芸的なぬいぐるみ的なものを
近代美術館が買ってくれるか
という、買ってくれないと思
います。これからやらなきゃな
らないのは、そこですね。人

形じゃないっていうことじゃな
いんですが、プライベートな
ことだけれど、すごく難しい問題
なんです。

リアリズムと人形

四谷 たとえばこの間、大丸
(東京店)でありましたスー
パーリアリズムの等身大のが
ありましたけれど、あれは彫刻
か人形かっていわれると、非常
に難しいですね。

小川 そうですね。ドウエイ
ン・ハンソンのことですね。

四谷 あのリアリズムと、松本
喜三郎や安本喜八のリアリス
ムはどう違うかっていうこと
です。ハンソンという人は、型
を取るんですね。

小川 そう、生きた人から型を
取りますね。

四谷 それに対して、松本喜三
郎や安本喜八は、リアリズムを
手で作り上げるんですね。型
を取らずに、思いを込めて肉付
けした立体と、思いは人間その
ものにあるものという違いがあ
るんじゃないかと。これはリア
リズムの話ですが、面影と、生
というものでしょうかね。

小川 シモンさんは、ハンソン
は人形だと思いませんか?

四谷 私は思いませんね。なぜ
人形と思わないかという、
あれは愛情の対象にならない
でしょう。あれは社会的な意味
あいの作品といえますかね。
小川 そうですね。目的が

はつきりしていますね。

四谷 で、愛の対象物として、
人形は濃度が強い。これが人形
の持っている特殊なもので
しょうけれども。濃度が強く
て、良けりゃいいんですが、強
すぎて足もとすぐわれちゃう
ような強い表現じゃ、自己がそ
こで奢り切っちゃう、難しいと
ころですね……。何でもそうで
すけど。

愛情の対象としての 人形

四谷 人形というのはそもそも
が埋葬品だったわけですけど、
人類の持っている心の中に何
かいとおしかったもの……、
こどもが枕みたいなのを背中に
背負って、擬人化してしゃ

べったりする、と人形とはそう
いうものであっていると思うん
です。だからそういう領域が
強いもの、アンティークの人
形、日本の三等身の御所人形
ね、可愛いなあという記憶が、
それで完結している気がします
ね。ただ、時代も違ってきました
し、個人個人違う情報が
入ってきて、こういう時代です
から、それじゃ済まされない人
生観があるわけですから、い
ろいろな表現とるのは自由なん
でしょうね。でも根底は、そう
いうことだと思えますね。そ
れとやっぱり美しいということ
ですね。やっぱり、醜いという
子供を作りたいと思っちゃうけ

ない。いいな、というものが条
件、という気がします。人間の
いわゆる行いとしてですから
ね。やっぱり美しくて清いも
の、そういう気がしますね。

小川 私は人形というのは、品
がなきゃいけないと思うん
です。単に上品という形に現れ
るものではなくて……、うま
く言えないんですけど。

四谷 品性の問題、たとえば裸
体でもって、非常にエロティッ
クな表現方法にしても、そうい
う表現をすることが決して下品
ではないんですね。作者側の心
の領域の問題でありましてね、
やはり僕なんかの場合、なにも
考えることなく、なるべく頭が
動かないように作ればいい
な、と。顔なんか作るとき、ほ
とんどそうなんです。ふと思
いが入るとそれがでちゃうん
です。で、何にも思っていない
で、ただ、無心に手だけ動けば
いいですよ。そのためには音
楽なんかがあるとそっちの方に
引っ張られますから。品とい
うことかというと、「欲しいいな
い」ということでしょうね。人
間が作りますから、「その人」
なんです。人形という、
残念ながら……呪縛ですね、
これは。

小川 人形とは一番ストレート
に自分がでる表現のような気が
しますね。

四谷 一番でやすい!だから、
嘘つけない。テクニシャンでど
んなうまく見せようと思つて

も、「ああ、この人、何もない」と。特に日本人は手先が器用で細々とできちゃいますから、ごまかされやすいんですけれど、「ある」ということと「ない」ということは明快ですね。「ある」というのは、魂ですね。ああ、いいなこれ、とかありますよ。まずそれですよ。だから、世の中は人形も昔に比べたら地平線というか、だいたい広がったような気がしますね。素材といい、表現方法といい。これからは僕なんかを考えられなかった世の中に認められる人形が必ず出てくると思います。そういう人はいると思います。面白いですね。

小川 ただ、時代はもう表現するものは尽くしていて難しいような気がします。

四谷 ま、いくとこまでいったんでしょか、美術は。僕もそれはよく考えるんですよ。箱根でマリソール展がありましたけれど、彼女は円空をよく見えていますね。西洋の彫刻になかったものです。それをちゃんと昇華して自分の中でアレンジして、僕はとっても新しいものを感じたんですね。だから何か新しい方法があると思うんですけどね。でもそれは難しい、悩みますね。

「とれたて」を人形に

四谷 以前は僕は自分の作品を巨大な工芸品とっていました

したね。大きな一メートルくらいの人形を張り子で抜いてね、地塗り胡粉をかけて来る日も来る日も磨きをかけて肌色をきれいに塗って……。そんなふうに入形というのは、最終的なところまで、段階がありすぎて、これは何か違うのかなーと、僕は今ちょっと思っているんです。昔は手間暇や時間をかけてなきゃってばかり駄目だよ、と思っていましてけど、今は逆にそれによって、ふっと思った「とれたて」の気持ちが消えちゃって、ぐちゃぐちゃになっちゃうくらい手の掛かるものだったら、それは、あまりいいもんじゃありません。手を変え品を変え、結局最初は何がほしかったんだろうというものが全部ふさぎ込まれてしまったら、息苦しいものになっちゃってしまうんじゃないか。これだけで、OKという表現をするには、精神性が相当高いと表現しきれないんですよ。あと緊張感、持ちこたえるエネルギー、もつとフレッシュ、これから要求されることはそういうことじゃないですか？ だからマリソールなんかみて、本当にショックだったし、自在なところに到達したな、という感じがしましたね。彼女はきつととれたたてだと思います。世界的なとれたたてです。だけど、それを表現するのは大変なことですよ、きつとやるまでに相当自分の中でデッサンしているんで

しょうね。で、やりだしたら早いと思います。荒っぽい感じできますから。これは、彫刻でも人形と言われないんです。手を加えない分、素材感とか表現の生がドーン！とでてきて、オブジェクトに包み込む時間とか、加わっていないんですよ。人形の場合、何とかそういう領域に突入できないか……。張り子抜いたら絵の具塗ってね、それでおしまいにしてもいいくらいなような。最初の原型一発で決まっちゃうという、ある意味で彫刻的な領域ですね。だから木彫なんているのは、直でいいな、と僕は思います。絵画ではアクションペインティングとか、彫刻ではジャコメッティなんかもそうです。即興的なもの……。それは精神です。精神と思想性がある論理です。ただ思いつきだけじゃ駄目です。なんか、そういうものできたらやりたいと思うんですよ。それがあくまでも人の形の領域のものであるということだね。

絶対的純情

でも結局ね、つらいですよ、何をやらたらいいのかわかってこととずつと悩んでいるしね。四十代は、ほとんどのものが作れませんでしたよ。

小川 それは何かスランプがあったということでしょうか？
四谷 そうですね。僕は、二十代の頃に、人形とは人形である

という持論を持って二十年間突っ走ってきたんです。で、四十越えた頃、人間って何だろう、ということになっちゃいましたね。この世って何？というところに入り込んだら、もう。本当に作れなくなっちゃって。座禅にも行きました。京都の知り合いのお坊さんに話に行つて、「できない」「何故できないか、シモンさん、手を動かさないからです」。それはわかっているんです。考えるから、できない。これ、性質でね、どうも考えるって性質で。結構大変でしたよ。もう止めようか、とか死んでしまおうかと思いましたが、死にはしませんけど、勇気ないから。ちよつと宗教的な領域に行きましたね。で、自分なりに、人間というものを除いてこの世のすべては完了していると思うようになりましたね。

小川 といいますと、一切というのは、地球とか、世界とか？
四谷 世界ですね。この世とか。そういう気がしますね。人間だから宗教的なものに揺れ動かし、物質的なもので満たされたこの世の有りようも良しとしてますし。で、天使なんてなんているものをふつと始めたんですが、濫澤（龍彦）さんが亡くなられる一年前に、「シモン、今度は何をやるんだ？」「今度は天使です」「あ、それは派手でいいな」って。派手っていわれましたね、ずいぶん昔

になっちゃいましたけど。何で天使なのかっていうことを考えたんですね。人類全体の無意識というものの切断面をみたら、その面はどこを向いているんだらうというのを濫澤さんと話したときに、僕は「神に向いている」という考え方を保持していたんですけど、同じだって言っていましたね。人類は神に向かっている。まあ、いろいろな解釈があつて良いわけですけど。じゃ、天使でもいいかなと安直な考え方ですけども（笑）。今、作りたいものがひとつあるんですけどね。最近顔を作ろうと思っているんですけど、もう、テーマ、タイトルは決まっているんですよ。絶対的純情」という……

小川 えーっ！

四谷 いいでしょ？（笑）

小川 ええ！（笑）

四谷 絶対的純情という、テーマ性と、顔、私たちがしばらく忘れてる……

小川 今では死語に近いかもしれませんね。

四谷 そうですね。でも、人間なんか若いときみんな純情なの。そういうときの人間でね、目はまだきれいだし、恥じらいもあるし。人間のいい面を純情という言葉は残しているんですよ。ちよつといい話、ちよつと悲しくてボロッと涙がでるような話、そういう水分がいつはいたまっているような。で、こんな人間がいたら、



ああいいな、この人は、つてきつと思うだろう、そういうものを作りたいですね。それも型をとるんじゃないくて。そこ

その自分のわずかな人形の歴史があつて、そして今は、さつきいったように、とれたての表現をしたい。絶対的純情！本気だったらいんです。嘘がないから。そのためには、よい考えがはいらないようにね、いい音楽を聴いてぼん！と作れたらいいな。といつてもそれがなかなかできないんですけどね。(笑)

小川 シモンさんはフレッシュで行こうということが出来るのは、ここまでの積み重ねがあつて初めて可能だと思ふんです。誰がやつてもいいか、というところの初心者があるのをやっちゃいけないような気がするんです。

四谷 いけないってことはないんです。やつてみて、良けりゃいいんです。でも、結局ね、やつぱりこれは経験してきたことに要に自信があります。なかなか到達するには険しい道ではあるね。小川さんは一生懸命なさっているけれど、世の中はまだまだですから。でも今回の人形芸術の世界展の図録で解説を書いている金子さんという方が(国立近代美術館主任研究官)、僕のこととそこそこ書いてくださいましたけれど、人形も工芸というところにとどまっているというわけにはい

かないだろうと、希望的観測をもっているから、いいかもしれせんね。

小川 近代美術館で何年前に あつた人形展での図録の年表には戦後空白の部分が多いんです。これが何かを象徴しているような気がするんですけれど。その年表に載らない人形作家たちは認められていないような。

四谷 やはり、個のもっている純度ですよ。変わりますよ、これからとんど。個のもっている純度を誰が認めるんですか？自分で認めるやいいじゃないですか。いい作品や展覧会が出現することがまず一番で、それをいつも望むことですね。自分ができたら一番うれしくいけど。それを他人がやつたらいいなと思ひながら嫉妬を交えつつ、ちくしよ、僕も頑張らなくちゃ、と思ひばいいですよ。それくらい、生々しくて。

小川 今、そういう意味で、意識しているような作家の方っていますか？

四谷 いや、ないですね、全然。

ベルメール体験

小川 強いて言えば、ハンス・ベルメールとかは？

四谷 いや、もうそれはなくなりました。自分で展覧会をやったときに、あ、僕はもう違うんだ、と思つたんですね。それまでは、結構な重圧でしたね。二十歳の頃にベルメール知って、

九年目にして、何をしているんだらう、と。でも、それをしないう限り、今はありませんでした。

小川 ぬいぐるみなどを作っていたのを、ベルメールを見たことがきっかけでかなり作風が変わつたということですか？

四谷 もう、全部捨てましたよ。昭和の初期に、僕が作りたいと思つていたものが、すでに出来上がつていたという解釈しましたから。もう、やめたと思つたんです。でもやめたといつてもそう簡単にはね。その時は本当にショックだったんです。で、その次何をしようかと……よし、真似しよう、と。しかし、真似はできなかつたですね。資質が違う。

小川 日本のアーティストドールの特徴かと思ふんですが、これだけハンス・ベルメールに影響されてる国ってないんじゃないかと思ひます。(笑)

四谷 閑節ね。言えるね。(笑) 小川 これはシモンさんと吉田(良二)さんの影響なのかなって思ふんですけれど。これだけ裸体の閑節人形を作る作家が多く、様式化しちゃうくらいのも珍しい。シモンさんが今も閑節で作っているというのは四谷 それはベルメールの影響ありますよ。でも、日本にも江戸の頃自在人形とか三ツ折れとか、ありましたね。自在人形。自らが在る。いい言葉だなあ、既にそれが江戸の頃に

あつたんだから。ベルメールどころの騒ぎじゃなくって。人間の考えることはそんなことなんだって。

小川 やはり閑節の魅力は、自在であるということでしょう？

四谷 結局、人形とは？といつてわかつたことは、人間と同じだつてことです。動くもんだつていうことです。要するに、固定された小さな彫刻ではないということですね。その当たり前さ。人間で、動かない塊かというところじゃない。

小川 今までの作品で自分で一番満足した作品とか、特別な作品とかございますか？

四谷 あまりそういうのってないですね。これからできそうって感じ。欲が深いから、僕は。(笑) 常に前向きで、やつてやるじゃないかという気持ちでいますからね。自分に課せる。だから疲れちゃうんですね。で、あきつぱいんですよ、同じことやつてるとあきちゃうんですよ。生き方はへたくそですね。そういう風に見えないらしいけど。金はないけど、怠け者。(笑)

ファンタジー

四谷 紀ノ国屋の展覧会(エコール・ド・シモン展)で、外人の女の人何となく入つてきて、僕の解剖の男の子の人形みてね、「ファンタスティック」って。この人、内蔵ので

いる人形を見て気持ち悪くなくて、ファンタスティック！僕の人形を見ていつてもらつた中で今までの、一番嬉しかった言葉ですね。ああ、こういう風に見てもらわなくてはいけなくなつて思つたんですね。自分の人形を、こういう風にファンタジーって見てくれるといいな、つてね。

小川 幻想的といわれるのが一番嬉しい……？

四谷 そうですね。ファンタジー。要するにそれは、勝手な思いこみで言う、底がない。この世とか人間のありようとか、本当にファンタジーです。

小川 でもシモンさんの存在自体、ファンタジックな感じがしますけどね、私は。

四谷 あ、そうですか？

小川 この間のエコール・ド・シモン展でお会いするまで、私にとつてはシモンさんは想像の世界の人でしたからね。(笑) 人形や状況劇場という言葉から得られるイメージは私にとつてかなりファンタジーでしたね。それもデカダンスの意味あいにおいて。でも初めてお会いしたときに、人形でいっぱしになるんだつたら、二十年はかかる、胡粉はきれいに刷毛で塗れて、木を削れて刀もきちんと磨けてとか大真面目な内容だったんで、えつと驚いてしまったんです。(笑)

四谷 結構リアルイズムね。(笑)

小川 非常に人形に関しては真

攀な取り組みをされているんだな、って。

四谷 大真面目なんですね、作ることに限っては。もう一回生まれ変わりたいと思っっていますよ。まあ、残された時間がありますから、作品にぶつきたいですね。常に流動という意味で、固まらないでね。作れなかった四十代、結構自分を追い詰めていつて。ちよつと宗教的な領域が入ってきたときでしたね。だからといって、宗教的なテーマを大真面目に突っ込んでいくかといったら、そうでもない。見えないものに手を合わせて拝むより今あるもの、目前に見えるもの、触れるものへの愛情がなくては駄目だ、という気持ちでした。だけど、人間というのは、不可思議な生き物だから形のないものに対する・・・そこそファンタジーにたいする憧れというものもあって、ぐるぐるぐるぐる、混乱といいますか、取り留めないことばかり考えていて、福引きじゃないけど、からからつと回して「人間を残して全て完了している」というのが見えたり、また今度は「絶対的純情」というのが見えたりして、音楽を聴いて、この間浅草の木馬館で、沖繩の四人姉妹みたいなグループが歌っているのが、いい歌だったんで、こういうのも結構いいぞ、って。単純でいいんです。深いから単純なんです。マリソールだってね、

思いが深くて熱いから、できるんですよ。でも何とか人形を作っている人たち、きつと時間かかっていると思いますよ、ぬいぐるみにしても。苦にならない人もいますよね、それが大好きでね。

小川 そうですね。元々そういう性格があるから人形にきているんでしょうね。

四谷 そう！民族性としてもそういうものってありますから。だからそれはそれとして、生き残らなきゃいけないものとしてあるような気もするんですよ。それが権威になってしまつては、駄目なんです。問題は、心、精神ですよ。その言い方も無責任なんだけど、結局はそれが原動力になり、素材、テクニクを考えることになりまうから。

日本人の心の現状

小川 シモンさんは、失礼ですが私には浮き世離れた印象があつたんですが、やはり政治とか教育の問題とか、お考えになることは多いですか？

四谷 ああ、思いますよ。正直言つて、よくわかりません、といつて逃げたい気持ちもあるんですけど、毎日、新聞を見れば目に入りますからね。電車なんか乗つて、シルバシートに若い人が座つていて、目の前にお年寄りがいても席を譲らない。譲らない方も無神経だけど、譲るように一言言わない

日本人も、無神経な日本人と同列です。これが今の日本の現状ですね。日本人全体がそうですね。そういうふうな育つたんで、ささいなことですけれど、大変な問題です。素直な喜怒哀楽、痛み、という感覚が鈍つてきたというふうなものないこととです。人間があつて人間中心というのは駄目なんですけど、やっぱり三つ子の魂ということですね。愛情に恵まれ、感受性豊かに優しい気持ちをもつた子が生まれ、大人の言つたことがとても嬉しいとおしく、大人の言つたことは大事なんだ、ということをつつ一つ重ねていつて、それはやはり教育ですね。

DFJ

小川 DFJを出して、一年になります。皆、人形の情報を、待つていたんだな、ということを実感しています。はじめの頃は、ネガティブなことも随分いわれていたので、随分、四谷 僕も、びっくりしました、正直言つて。今回の福島（弘太郎）君の記事（DFJ5）にかいてありましたけれど、戦後何度もあつた創作人形の盛り上がり、一過性だったんです。今、こういう運動というのか、画期的な時期に入つてきている気がします。先輩が努力しないといけないですね。あと、食べていけないといけないんです。

小川 そうですね。

四谷 それでは、この九州の方ですか（ラ・ファミーユの中島氏）、この方の話読みましたけど、絵でもなんでも同じでね、売れるということは大変なことですよ。

小川 日本はマーケットが成熟していませんから、価格などとも思い思いのものになつてしまつていんですよ。またきちんとしたアドバイスのできる業者もいない。

四谷 芸術作品といえども、プライスがついた途端に商品になるんですよ。これだけ材料と時間をかけたから、これだけもらわなきゃ、というのでは話は始まらないんです。そういうところ、皆素人ですね。自分で好きで作つたものがお金に換わるということが、どういうことかといふことをまず考えなければならぬですね。プライドは大事ですよ。魂を売つていんですよ。でも値段を下げることによって自分の作品の価値が下がるということとは違ふんです。それより、お金を出して自分の作品をほしい、という人がいたということが大変なことなんです。ふつうは、いいな、といつても買いません。

小川 若手の人に言いたいことなどありますか？

四谷 まず、自分を信することですね。



インタビューを終えて

シモン氏の人形を知つたのは、もう、二十年以上も前、高校生の頃。この人形を引くにつれて離さない美しく勝ちな人形を作るのは、一体どんな人なのか、私にとっては空想上の人物にしかすぎなかった。そのシモン氏に話を伺うとあつていささか緊張したが、氏の人格は気さくで、「このいとおしい分野に携わってくれた」と取材を歓迎して下さつた。氏のDFJへの期待を裏切らないためにも、その人形に対する真摯で熱い精神を伝え、学んでいきたいと思つた。

小川 恵子
一九九五年六月九日 エコールド・シモンにて



注

川崎ブツベ 一九〇五〜七八
布人形作家、ぬいぐるみのフ
ランス人形や、彫刻的な造形
に迫るスケールの大きな作品を
制作するなど多彩に制作した。
昭和二年にイルフトイスを結
成、三十七年にはのすみれ会を主
宰するなど、積極的に活動し
た。

日展

戦前は帝展とよばれる。絵画、
彫刻、工芸などの全国最大の団
体展。当時活発に活動してい
た日本人形研究会が帝展美術
工芸部に人形を参加させる運動
を提唱、昭和十一年に堀柳女
らの人形作家が入選してから、
文展、日展と改称され、現在に
至る。

伝統工芸

毎年、日本工芸会が主催する日
本伝統工芸展のこと。一九五七
年に伝統的工芸技術の保存と
普及のため第一回日本伝統工
芸展が開催された。

現代人形美術展

一九五四年に朝日新聞社が主
催、ジャンルを問わずに行われ
た一般公募展で、堀柳女、平田
郷陽らが審査員をつとめ、数年
間開催された。

ドウェイン・ハンソン

一九二五年アメリカ生まれ
スーパリアリズムの作家とし
て生きた人物から直接型を取り
、彩色、植毛した上に本物の
衣服を着せる。社会的な批判を
込めた作品や、アメリカ人の
日常生活を浮き彫りにした作
品が中心。

松本喜三郎・安本喜八

明治時代に興業で活躍した生
き人形作家

胡粉

貝殻の粉末を膠で練った塗料。

伝統的に日本人形に使われて
きたが、習得するには技術と
修練を要し、保管にも温度や湿
度など適切な管理が必要。

マリソール 一九三〇〜

ベネズエラの彫刻家
一九六二年のニューヨーク個展
で木製の箱形のような人物像
を発表して注目を浴びる。有名
人をモデルにした作品群を中
心として、その表現にはユー
モアやアメリカ社会への風刺が
流れている。

ジャコメッティ

一九〇一〜六六
スイスの彫刻家、画家。シュ
ルレアリスムの運動に参加。
人間の実存を凝縮したような細
長い、人体の作品の独自性によ
って広く注目された。代表
作「指さす男」

澁澤龍彦 一九二八〜八七

仏文学者、評論家、エッセイ
スト、小説家サド・コクトーなど
を翻訳し、評論を出版。エロ
ティシズムや幻想文学にかんず
る独創的な考察を展開した。
ハンス・ヘルメル

一九〇二〜七五

ドイツの画家、造形作家。一九
三三年から関節のはずれた少
女の人形を作り出す。シュ
ールレアリスム運動に参加。巧み
な描写によってエロティック
な解剖学的イメージを展開し
た素描や版画が多い。(新潮世
界美術事典より)

国立近代美術館の人形展

昭和六一年に東京国立近代美
術館工芸館が昭和期の人形作
家の作品を展示した展覧会「人
形工芸」のこと。

紀ノ国屋

新宿・紀伊国屋書店のこと。四
谷シモン門下生の作品展が毎年
行われる

四谷シモン略歴

一九四四年東京生まれ
十才の時人形作りを始める。
一九才の時にハンスベルメルを知り、
シュールレアリスムに傾倒。
一九六七年
唐十朗率いる状況劇場の多層に出演する
ようになり、役者時代が続く。澁澤龍彦と
知り合う。

一九七三年

銀座青木画廊で第一回個展「未来と過去
のイブ」で十体の等身大の女性の作品
を発表

一九七四年

第十一回東京ビエンナーレ展に招待出品
一九七八年
エコール・ド・シモン開校

一九八〇年

個展「メカニズムと少年、あるいは男根的
自己愛」(青木画廊)

一九八一年

紀伊国屋画廊で第二回エコール・ド・シモ
ン展

一九八二年

個展「ラムール・ラムール」(青木画廊)

一九八三年

第二回エコール・ド・シモン展(紀伊国屋
画廊、以後毎年開催される) 個展「解剖学
の少年」(青木画廊)

一九八四年

個展「未来と過去のアダム」(青木画廊)
以後、埼玉県立美術館(何故か気になる人
間像)展、宮城県立美術館(美術の国の人
形たち)展などに出品。

一九九〇年

徳島県立美術館が作品を購入、常設展示
される。

著書「シモンのシモン(二時計仕掛けの神)
写真集「四谷シモン 人形愛」(美術出版
社)

とおりやんせ

群馬県桐生市の中心街をはずれてすぐ、見晴らしの良い丘の中腹にある古い民家が昨年10月に開店した「とおりやんせ」。百日紅にアンティークランプをあしらった手作りの看板と、ピンク色の合歡の花に迎えられ、入り口の階段を下り、座敷にあがると町の時間の流れを忘れさせてくれる空間がそこにはある。

「お店に来る、というよりは、金居さんちに遊びに来るっていう感じなのよね」という金居孝子さんとご主人の泰正さん夫妻が、やさしいオルゴールの音で迎えてくれた。とおりやんせでは、季節の折々に模様替えや企画展をしながら、オルゴール、現代創作人形と手作り家具を扱っている。人との心のふれあいにこだわって、端から見ていてこれでやっていけるのだろうか、と心配になるくらい、丁寧に人につきあい、商品や作品とつきあっていく。何しろ、子連れの母親のために、赤ん坊の昼寝布団まであるくらいだ。だがこれがとおりやんせの素晴らしいところで、夫婦の豊かな心に、また豊かな心が引き寄せられるのだろうか、地域の若者や文化人を中心に、様々な人が店に集まっては店づくりを手伝い、はては、ここを拠点としてイベントなどを行うようになった。現在それらの若者を中心に、郷土の「てぬた踊り」（手ぬぐいとタオルと割り箸で簡単に作る操り人形、最小限の細工と操作で生まれる人形の動きは絶妙！）を保存する

気運が高まり、八月には店の庭でそのためのステージも開かれる。

このようなお店だから、人形作品にもこだわりがある。孝子さんは、この八月に予定している人形展で、小川仁子さん、永野智さん、小牧多賀子さんの三人を選び、「木、紙、布の出会い」をテーマに展示、見る人が人形に集中してもらうために他の商品は一切店頭からはずす予定だ。人形を販売することを、孝子さんは「仲人をする」といい、売れると「お嫁に出した」という。「お嫁に出した」後も、人形のその後を気にかけ、作者にも報告する。作家にとっても励みになるでしょう、とここにも金居さんのこだわりと気遣いがある。今後、とおりやんせでは、11月にサンタクロースの部屋展がある。



とおりやんせ

〒376 桐生市堤町3-8-2 TEL + FAX 0277-22-8777
営業時間 午前11時～午後8時 定休日 木曜日

16

お化け屋敷店長日記 第2回 立体への

結婚する前はイラストレーターだったので、ずっと平面のみに目を向けていました。紙の上で展開される厚みのない世界です。もちろんそれはそれでとても素晴らしい仕事でした。でも心の片隅に何か違和感があるのです。結婚後、主人の仕事を手伝いだして、絵の仕事から手をひきました。1年半前、久しぶりにゆっくり時間がもて、ある人物画を描きました。その時、ふと思ったんです。「この絵の人物がもし実際の人間のように立体となって現れたら、なんてステキかしらー」それからしばらくして、この思い（願い）は、ますます大きくなり、ちょうど同じ頃、友人からプレ

ゼントされた粘土を初めて手にしました。最初のひんやりとした感覚に、自分の体温で温かくなっていく変化に不思議な安心感を覚えました。夢中でつくった私の初めての人形は、決して絵のように思い通りには作れなかったけれど、作っている間中、私には、ものすごい確信がありました。

ずっと探していたものを見つけた確信です。私の作ったつたない人形には、後ろ姿があるのです！手でその子に接（ふ）れると、人間の体温が伝わってくるのです。その体温の冷たさは、他の人より少し平熱の高い私には、とても気持ちよく感じられます。そして、人形には体

摩宮ピノン

臭もありました！ああ、これが立体なんだ！新しい世界に一歩足を踏み入れた感激。こんなこと書くの恥ずかしいけれど、私、その人形に名前を付けました。絵の中の人物に名前を付けたことってありませんでした。名前はマザーです。今もこの子は私のそばにいます。私の方をうっとり見ていて、いろいろ話しかけてきそうです。なまけ者の私を怒っていることもあるけれど・・・。

（訂正とお詫び：5号誌上で摩宮ピノンさんのお名前を、「魔宮ピノン」としたのは誤りです。ここに訂正し、摩宮さん大変ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。DFJ編集部）





ミス・ジョニー

FROM OVERSEAS

ジュディス・クラウィッター



ティルマン ポール (ブリ ストルの肉屋)

世界でもっとも美しい人形美術館として知られるアメリカのシアトルにあるロザリー・ワイエル人形美術館。館長のワイエルは、ある日モンタナに住むジュディス・クラウィッターからの手紙に同封された人形の写真に心を奪われた。彼女の人形には、年をとっていたり疲れきっていたり、どう見ても外見的に美しいとは言えないが、どれもが美しい心の持ち主だとよくわかり、どんな人の心にも語りかけるものがあつた。ワイエルは迷いもせずすぐに彼女に連絡を取り、間近に控えたクリスマスへの展示に出品を依頼し、独占契約の準備を始めた。

その後、クラウィッターは、主要な展覧会に出品を重ね、全米での評価を重ねつつある。「私は、自分の人形がその服を着て生活していたように見せたい」と、使っている古裂について語る。彼女の人形の目は、その人生経験を語るかのようなものである。ボディはポリフォーム。クラウィッターは現在、同美術館のクリスマスの展示のために、「市場! 1800年代のイギリスの露天商」を制作中。企画展示室を愉快的な市場の人々で埋め尽くす予定だ。人形はもちろん、市場や町の全てをクラウィッターが自分でデザイン、人情に溢れる世界を再現する。クラウィッターの作品は全て一体もので、ワイエル美術館が独占販売権を所有する。

(ロザリー・ワイエル人形美術館記)

展覧会より

山口景子人形展より



ゆすら人形展

5月17日〜28日 岩崎ミュージアム(横浜)

ゲート座とも呼ばれる古い洋館で行われたゆすらさんの作品展。海外での生活経験もあるゆすらさんは、国際性に富んだ感性で、中国の少女「赤い花」、マリオネットの「パレリーナ」、ビスクの「蜂の子」からくり人形の「角兵衛獅子」、ユーモアのある「たぬきの娘のおつかい」など、新作17体を含む41体の力作を展示、横浜という地域性を、図らずもよく象徴していた。「気が多くて、あれもこれもやりたい」と意欲的にパッキング、ビスク、石塑など様々な素材を扱うが、作品には好奇心だけともいえない作者の発想の幅の広さ、養女の情感の世界を表現することでは深さを感じさせる。不機嫌な女の子の表情が今までの印象では強かったが、思い切った鮮やかな配色の「トロピカル

フルーツ」のように、最近では明るいトーンのものも増えてきたそうだ。(写真20頁)

粧順・創作人形展

5月24日〜29日 草蜻蛉アチャ(金沢) (写真20頁)

歌舞伎門をくぐると苔むした庭。会場である古い町家に入ると水盤に花がさしてあり、そばで粧順さんの作品「銀杏坊や」が出迎える。今日はいいものが見られそう、と期待して、急な階段を二階に上っていくと、古式ゆかしき和室の空間に細やかに演出された照明による粧順の幻想的な世界があった。テーマにちなみ、人形たちは草や蔦と共に飾られ、見る人は座敷でくつろぎながら一体一体じっくり手にとって鑑賞できる。ピクマリオンで人形制作を学んだ粧順さんは、前回は東京で個展を行ったが、その時出品した妖精に加えて展示

された新作の関節の赤ちゃんの人形二体には、更にパワーアップした印象を受けた(Y)

赤川 BONE 作品展

森の幻想 5月3日〜28日 山猫軒(埼玉)

梅の産地で知られる埼玉県越生市。黒姫山に向かう山道沿いの民家ギャラリー「山猫軒」の玄関には、山猫が大きく口を開けた銅製の「注文の多い料理店のドア」がかけられてある。制作は、銅人形・オブジェの作家、赤川 BONE 氏。氏は今回の作品展で、奥多摩駅前の「森と泉と生命の樹」などのいくつかの屋外ミニュメントを縮小した作品や、花器、動物のオブジェなどの小品を和座敷に展示、庭では、「ロバ」や、楽器風のオブジェを展示した。「ロバ」は、越生の木こりが切りだした木を4年間ねかせてこの作品展のためにイメージを育んだという。いずれもが作者の暖かくユーモアにあふれた世界の入口だった。(写真20頁)

安藤早苗・中村みどり

人形展 5月21日〜30日 せ・らるる(新宿)

人形教室「仏蘭西館」で出会い、共に「ピクマリオン」で吉田良一氏に師事した二人が続け

ている作品展で、最近二年間の作品を展示した。目を見開き、口をすぼめた可憐な表情の中にもはつきり自己主張をするような安藤さんの作品とは対照的に、中村さんは色を抑え目にして静かな表現となっている。本人は、迷いがあって抜けきれないと言っただが、二人とも球体関節の作品が中心で、安藤さんは今回は腹部を割り、更

ている作品展で、最近二年間の作品を展示した。目を見開き、口をすぼめた可憐な表情の中にもはつきり自己主張をするような安藤さんの作品とは対照的に、中村さんは色を抑え目にして静かな表現となっている。本人は、迷いがあって抜けきれないと言っただが、二人とも球体関節の作品が中心で、安藤さんは今回は腹部を割り、更



に関節人形の表現の豊かさを求めた。刺激しあいながら制作を続けてきた二人は、人の心に訴えかける作品を目指し、これからが本番だとかたっていた。

田畑恵美子人形教室

創作人形展 時間の贈り物 長崎屋桐生店文化展ホール 6月1日〜5日



今回は、臉が閉じる抱き人形を出品した。家庭も大切に育んできた田畑さんの作品は、安定した造形の美しさと暖かさに満ち溢れている。(K)

山口景子人形展

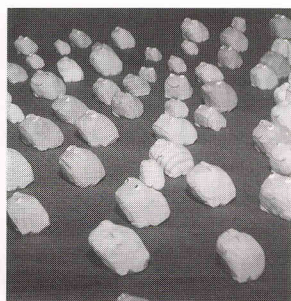
5月27日〜6月4日 メノワ(東京・虎ノ門)

ニューヨークより帰国以来、活発に活動が続ける山口景子さんの東京での久しぶりの個展がホテルオークラ内のギャラリー、メノワで開かれた。渡米前に手がけながら制作を中断していた布巻き人形「青の種族」「白の種族」のシリーズ(写真)が復活、山口さんの大きな特徴である大胆なデフォルメは施されていない小品群だが、新鮮な印象で好評を博していた。オープン日にあわせて出版された作品集「遠い国・遠い人々」からも、ご主人の力靖氏制作のステージによる「アラウェイ・ランド」などを出品、あわせて30点あまりが展示された。ギャラリーメノワでは、個展終了後も、山口さんの作品を常時展示している。

郷土で地道な制作活動が続けている粘土人形作家田畑恵美子さんの教室の作品展は、人形作りの楽しさが伝わってくる。最近では共通テーマを決めての取り組みで、91年の「森」、92年の「ショウタイム」に続いて、今回は「時」。壁面に各々の創作時計を飾り、その下に32点の人形作品が並ぶ。12年目の教室は、40〜50代の女性を中心だが、若手23才の作品は、バニー人形の体型を思わせる裸婦。「光陰矢のごとし」の題のつく着物姿の人形は、80才の方の作。粘土で作った固定ポーズ人形に直接彩色する作品をもっとも得意とする田畑さんは、毎回、新しい試みに挑戦。

早瀬康司 (鮎展)

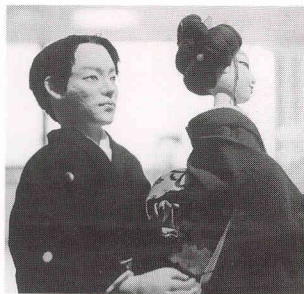
5月31日〜6月10日
東京都美術館



若手前衛美術作家の団体展である「鮎展」の出口付近で、人形作品を出品し続けた早瀬康司氏は、今回の出品を持って退会される。同展において最後の出品となる今回の作品は昨年同様、一見、細かなさいころ大の木片が一面にちりばめてあるようにしか見えない「鮎展出口 千地蔵童子ケ丘」と「鮎展出口 蛙の歌が聞こえてくるが池」など。しゃがみこんでよくのぞき込むと「千地蔵」はすべてお地蔵様、「蛙」は、すべて蛙。それも、ひとつひとつ表情が微妙に違う。期待していた「大きな」作品には出会えなかったが、今回の退会で何を終わらせるのだらう。氏の今後を見守っていたい。

ホリヒロシ人形教室展

6月11日〜20日
せ・らるる (新宿)
四回目的の教室展を五年ぶりに



開催した。ホリヒロシ氏といえ、美しい操り人形の舞台が有名だが今回の教室展では、総勢57名の生徒の作品が二回のクールに分けて展示された。ホリ氏は着物の昔の良き色あわせにこだわり、生徒にも目を肥やすよう指導する。テーマは古いものでも、作る意識が新しければ、現代的なものになる。創作物のでも、まず時代や人となり、髪型なりを考証してから、スタイリストのような仕事を人形に施していくようにする。習作が中心なので、教室の様子がよくうかがえる。基礎の兎の雛、狐の嫁入りから、市松人形、創作へと発展していくそうだが、同じ題材を扱いながら縮緬を使って針と糸だけで仕上げる作品の裂あわせ、色あわせに生徒の思い

思いの創意工夫が込められていた。

せ・らるる主催 チャリテイ・バザール人形展

(関西地区災害のために)

6月21日〜28日 せ・らるる

1月の阪神大震災の被災者のためのチャリテイ・バザールをせ・らるるが主催。店長の金田慶南さんの呼びかけに馴染みの深い人形作家ら15人が協力、人形、版画、レリーフなど約60点の作品を出品した。せ・らるるのファンにとつては、見逃せない内容となったその内容は、友永詔三の版画、吉田良一のトルソー、坂田由利子の妖精、滝康子の革の人形、副島弘太郎のビスクトール、山吉由利子の赤い着物の抱き人形、他に水澄美恵子、渡辺素子、奈里多究星、荒木野馬、ヨシカワゴエモン、高木治美、藤井路以、水無川リナ。(写真20頁)

世界の人形展

若月まり子の妖精の世界

6月25日〜7月1日

丸善日本橋店

ドルスバードが毎年同会場で行う人形展。今年は、例年の内容とは異なり、トムリンソンのレプリカ人形と、創作では若月まり子さんだけに絞った内容となった。小さな妖精や、長いモヘアのカリーヘア、美しい色調の夢見がちなドレス

などが女性心をくすぐり、市場で反響を呼んでいる若月さんは、群像で表現した「真夏の夜の夢」、「ラヴェンタールはあおい(マザーグースの歌より)」などを展示するほか、販売向けに大小50体以上の可憐なビスクトールを陳列した。(写真20頁)

小田島潮・兒玉幸治作品展 Double Exposure (写真展)

7月1日〜12日
赤レンガ (東京・西荻窪)



タイトルは「二十露出」の意味。小田島潮は人形作家兒玉幸治氏の写真家としての名前である。住宅街にある静かなコヒーハウスでは、小田島氏の写真6点と兒玉氏のマスク3点が壁面に展示されていた。マスクに関しては、ロックのアーティストを彷彿とさせるようなポップな作品だった。写真は、裸体の関節人形の様々なショット。兒玉氏は、人形を多くの人にアピールしていく

ことに積極的な考えを持ち、先に本誌で紹介したパソコンによるネットワーク「パフォス通信」なども手がけている。今回は、日常生活の場における展示となったが、バロックの流れる店内の雰囲気の中で、平面であるということと自己主張しすぎることなく見る人の選択にまかせて鑑賞されていた。このような展示のあり方も、これからもっと広がっていくべきだろう。

奈里多究星・人形個展・芝居人形

7月2日〜9日

せ・らるる (新宿)

鮮やかにきらめく色彩が美しい奈里多究星氏の芝居人形の世界。今まで操り人形の芝居で使用した「メートル以上ある「太陽神」や「マレーヌ姫」、ピエロなどの作品を中心に、何点かの置き人形を展示した。性を感じさせない冷たい線が作る美形の顔立ちに、独創的なコスチュームとアクセサリ。コスチュームには着物の帯などが好まれて使われている。23才から制作を始めたが、一度は映画を目指したこともあり、人形のもつ美しくミステリアスな魅力をもそのまま表現するために、脚本や演出よりも、人形が中心にいる舞台を展開してきた。今はしばらく中断しているが、いつか必ず再会するとのことだ。(写真20頁)

トビックス

昔人形コレクション

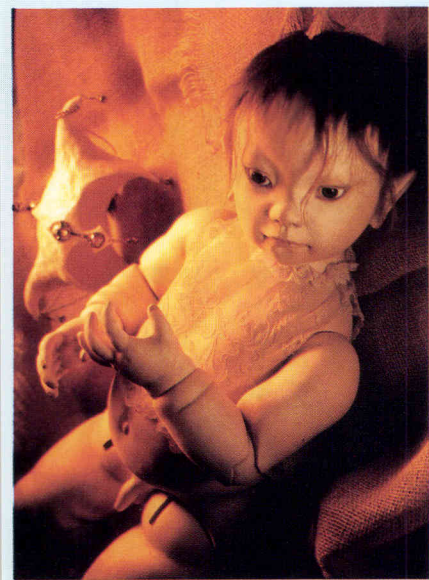
95 東京展 「人形とワインのタベ」 開かれる

DFJ読者にはなじみの京都の昔人形青山が主催する東京展が7月14日から16日まで開催された。15日夜には「人形とワインのタベ」がにぎやかに開かれた。今年の東京コレクションの特集は「細陽デイストな人形たち」、平田郷陽に影響を受けた作家の往時の人形を中心に、芝居人形や今号の福島弘太郎さんがふれた自由人形など、稀少な人形を背に「？」私が着いたときはオーナリーの青山氏をはじめとして各地から集った人々が赤い頭をしてすっかりできあがっている様子。作り手では山吉由利子さん、山本七生さん、兒玉幸治さん、岡馬崎さん、伽井丹彌さんらの顔が見えた。フオックギターの弾き語りあり、抽選会あり、楽しい会の中で私もすっかりDFJをアピールさせて頂いた。悲しいニュースが一つ。昔人形青山の人の魅力のな写真集を綴った青山氏の弟である静男氏がこの春逝去された。DFJ一号をご覧の方は記憶にあると思うが「人形つづれ」に使用した山本郷陽の人の写真も彼によるものである。謹んで静男氏の冥福を祈ります。昔人形青山は秋には昔人形青山館と改称し、人形の情報源として積極的に活動してくれるとのこと、人形ファンにとってはますます心強い拠点となりそうだ。(小川千恵子記)





せ・ら・るるチャリティー・バザール人形展より
荒木野馬



粧順 創作人形展より

奈里多究星 人形個展より



世界の人形展より 若月まり子



赤川 BONZE 作品展より

ゆすら人形展より



展覧会より



平田郷陽 「洛北の秋」



四谷シモン
ANGES MELANGES, ANGES DERANGES



竹久夢二 「少年」



堀柳女 「天鼓」

— 夢二から 現代へ —

人形芸術の世界展

日本経済新聞社主催 6月29日～7月11日 銀座松坂屋

今は亡き堀柳女、平田郷陽などの人間国宝の作品をはじめ四谷シモン、辻村ジュサブロー、与真鐘などの現代作家にいたるまでの三十六人の作家百二十点を超える「人形芸術の世界展」東京展が日本経済新聞社の主催で銀座松坂屋で開催された。

現代人形を語るに欠かせない大正以降の各作家の代表作がそろったという事で先に行われた大阪展も好評で、必見の展覧会との前評判が高かった。主催者によれば、五人の人間国宝の作品を核に新旧のコントラストを意識したというが、全体に格調が高い内容となり、若い人から幅広い年齢層に見てもらえたという。期待は裏切られることなく、「鉦鼓」など堀柳女の気品溢れる七作品や、平田郷陽の「雲の花」や生き人形の「洛北の秋」を含む七作品他、写真集でしか見たことのないような名作が勢揃いし、時代時代を作り上げた衝撃を追体験することができ、感慨深いものがあつた。川崎フツペをはじめ美術としての新しい人形の領域を求めた四谷シモン、インスタレーションを意識した岡本潤三、裂に対するエネルギーの結晶とも思える辻村ジュサブローのオロチ、妖精の与真鐘、優美な線が印象的な木彫作家の友永昭三、異色などころでは結城美栄子の陶人形などが、それぞれに異なる方向性を提示し、新たな人形の可能性を感じさせた。

CLASSES

入：入学金 / 備：設備費 / 月：月謝

教室案内はD F J 偶数号で
無料掲載いたします。

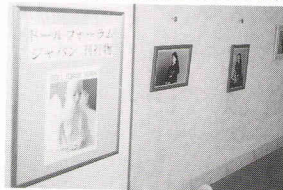
ドールスペースビッグマリオン	竹取物語人形学校	エコール・ド・シモン	Iwakiri Doll
〒158 世田谷区奥沢 6-28-14 林コーポ 201 ☎ 03-3704-3730 月：福島弘太郎 木、金、土、 第1、3日： 吉田良一 入：20000 備：1000 月：12000 ◎布、粘土、 シリコン FRP	〒171 豊島区目白 3-17-27 ☎ 03-3957-3395 月：宮崎優人 火：竹村和子 水：桑原静江 木：小林三千子 入：20000 月：8500 ～12000 ◎市松 着物縫い方 布、胡粉	渋谷区千駄ヶ谷 3-5-4 ☎ 03-3402-9488 月、火、水、木、土 入：50000 備：2000 月：14000～ 20000 ◎紙粘土、 桐塑、 胡粉 FRP	〒158 世田谷区上用賀 5-27-20 ☎ 03-3425-2396 月、火、水、木、金、土、日 入：15000 月：5000～ 21000 ◎石塑 和紙張り
荒木野馬人形教室	滝 康子人形教室	藤井路以教室	ART モマージュ 所由紀子教室
〒242 大和市西鶴間 8-4-29 ☎ 0462-77-1332 毎週、火曜日、日曜日 11:00～4:30 入：20000 備：1000 月：12000 ◎石塑 木の粘土 関節人形を 中心に	〒333 川口市芝 4178-29 ☎ 048-268-7380 毎週水曜日 10:30～1:00 2:00～4:30 入：15000 備：1000 月：12000 ～15000 ◎革張り人形 布・粘土・ 胡粉なども	〒158 板橋区中丸町 39-2-104 ☎ 03-3530-6598 火曜日・金曜日、第四日曜日 入：20000 月：12000 雑費：500 ◎石塑 金属 ガラス	〒206 多摩市貝取 2-5-3-506 ☎ 0423-76-1494 第一、第二、第三金曜 月：9000
水澄美恵子人形教室	布と綿で遊ぶ創作布人形	創作粘土の会ラ・バンボーラ	ドール・サロン麻生
〒206 多摩市落合 2+35 パルテノンたき 5 F ☎ 0423-38-8639 第一、第三木曜日 入：10000 月：10000 ◎桐塑、張り子 名古屋にも教室有り	東京都中央区日本橋室町 1-4-1 大木コーポ 201 ☎ 03-3274-8595 講師 松原登代子 佐々木明子 第2水曜日 入：6000 6ヶ月受講料 27000	練馬区石神井台 1-12-11 ☎ 03-3997-8687 入：15000 月：12000 読売文化センター 他に教室有り ◎ビスク 磁器 桐塑	〒194 町田市玉川学園 2-11-7 ☎ 0427-20-1423 入：10000 月：3000 ～6000 ◎ビスク 磁器 桐塑
安藤早苗創作人形教室	高橋操のオブジェドール教室	ミワ・ドール・アカデミー	創作人形 太山レミ
川越教室 川越市臨本町 14-12 第1住宅ビル ☎ 0492-47-5000 町田教室 町田市森野 1-37-1POPビル 0427-22-4030 川越 第2月曜日 月：15000 町田読売文化 センター 第2,4火曜日 月：15000	〒150 渋谷区桜丘 13-15 よみうり渋谷アカデミー ☎ 03-5458-8844 毎週水曜日 (月2回) 入：5000 月：4000	〒157 東京都世田谷区砧 8-26-1 ☎ 03-3415-3819 アトリエの引越 に伴い新体制準 備中 曜日・月謝につ いてはお問い合 わせを ◎ビスク	広島市中区十日市町 2-7-24 コーポサンシャイン 102 ☎ 082-281-5069 第1,2,4火・土 月：5000 ★教室展が あります。 10/12～17 ギャラリー てんぐスクエア 広島市中区 大手町 1-5-12

DFJ 活動報告

DFJ 写真展

小牧多賀子の世界

ドール・フォーラム・ジャパン主催の人形写真展が、6月3日から7月8日まで、神田駿河台の外国語専門学校アテナ・フランセにおいて行われた。同校の厚意により、学生ホールの壁面を展示スペースとして提供されたもので、3月に行われたリーゼ現代人形コレクション展に続き、2回目の写真展となった小牧多



賀子さんの作品も、場所柄、文化への関心が高い多くの人の目に触れ、好評を博した。DFJ主催の写真展は今後も定期的に行われ、次回は11月頃の予定。

DFJ ワークショップ

和紙による表面処理

6月25日、東京都世田谷区にある岩切人形教室で講師に岩切映幹子さんを迎え、第1回DFJのワークショップが開かれた。この日の参加者は7人で、今まで和紙を扱ったことはないということだったが、いずれも制作歴が長い人が集まっていたので、「飲み込みが早くていいね」と、講師やスタッフ一同驚いた

様子だった。初対面ではじめはやや緊張がちな面々だったが、すぐに和やかな雰囲気になり、人形にかなする情報が飛び交っていた。DFJはこれからも、このように情報交換の場を提供していく予定である。このようなワークショップを開いて欲しいという希望があれば、DFJ事務局まで。



粘土乾燥箱

ワークショップで思わぬ発見！布団乾燥機を利用した石壁粘土乾燥箱。開催日は梅雨時、石壁の乾燥で悩んでいた参加者にとって発見だったのが、岩切人形教室名物「乾燥箱」。作り方は簡単、段ボールに穴をあけ、乾燥機のホースをつなぐだけ。小さなものなら2〜3分で乾く。



LETTERS

「箱」の話は面白かったです。私も同じ体験をして、小さい人形(50cm)だったのでモスボックスを分解して作ったことがあります。あと、家にしまっておいたり発送の時は、八百屋でネギとか入っていた発砲スチロールの箱はとても便利でした。(魚屋のはマレモンで洗ってもなかなかつかない)・・・東京などへなかなか行けない私は、DFJの人形展の記事などが大変楽しみです。小川さん、皆様、頑張ってください！DFJはうんとたのしみしていますよー。

〔仙台市 渋谷真理子〕

■渋谷さんは、イラストレーターの仕事もしており、イラスト入りの楽しい長いお手紙をくださいました。どうもありがとうございます。私も決して楽なことばかりじゃないので、とても励みになってしばらくお手紙を持ち歩いていました。渋谷さんは、障害児の親のサークル「ぼればれくらぶ」に入っていて、楽しいイラストがいっぱい入っている。「今どきしょうがい児の母親物語(ぶどう社・千五百円)」という本を出版し、全国の多くの人に読まれているそうです。この本について渋谷さんは、「頑張っているお母さん」ではなく、「ありのままの子供」を受けとめたように「ありのままの私」を主張したくなります。「ありのままの私」とは創造することを求める心で、私にとってはイラストと人形なのです。だれのお母さんでも、奥さんでもなく「ありのままの私」があるから心のゆとりを持って今の生活を頑張っている気がするのです。『と書いています。現在はお仕事や療育に忙しいのですが、同封いただいた写真のよう、優しい目をした人形をまた拝見したいと思います。』

小川

23

●DFJよりのお知らせ

DFJのバックナンバー1〜3号は在庫がなくなり、これからは再版いたしません。4号もまもなく在庫がなくなります。在庫がなくなった分に関し、内容をお知りになりたい方には白黒のコピーを実費にておわけしておりますので事務局までお問い合わせください。今号でお伝える予定の「日米ドールアート文化交流事業」の報告は、次号で致します。

●投稿募集

LETTERS、REVIEW・・・採用分にはリーゼはがきセットを進呈。

INFORMATION ニュースがあったらお知らせください。

近況報告 プロの作家の新作の発表の場です。採用分には規定稿料をお支払いいたします。

教室案内 DFJ偶数号に掲載いたします。写真は返却できません。

展覧会案内 随時受け付けます。早めにご連絡ください。写真は後からでも結構です。

●次号原稿締切 10月10日必着

写真の返却が必要などには、「返却希望」と明記してください。

●DFJ購読方法

ドール・フォーラム・ジャパン(DFJ)は書店では販売されていません。購読は、

会員購読制です。

DFJは年に4回：2月、5月、8月、11月に発行されます。初年度会費は5千円、継続会費は4千5百円です。お申し込みは年会費を下記の方法でご送金ください。

◆郵便振替 00120-8-717693

「ユーラシア・ドルズ」(通信欄にDFJと記入)

◆現金書留 または郵便小為替

●継続手続きはお早めに！

今号で会員期限の切れる方には郵便振替用紙を同封しています。継続会員の年会費は4500円です。翌号発行までにお申し込みのない場合は、無効となりますのでご注意ください。

●バックナンバー 4号(表紙 吉田良一)、5号(後藤朝子)

会員の方は1部1000円です。非会員の方：1400円

ドール・フォーラム・ジャパン第6号 1995年8月19日発行

編集発行 ドール・フォーラム・ジャパン事務局

〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57 TEL 0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

編集責任者 小川千恵子

印刷 株式会社 日出島

次号は11月24日発行予定

展覧会DM同封希望の方(個展DMは会員のみ)は11月15日必着 枚数はお問合せ下さい

編集後記

ドール・フォーラム・ジャパン編集局長 小川千恵子

今ももう、使い古されしまった感のある言葉「愛」と「心」。月並みな言い方だが人形を買う、ということは自分にしか見えない「愛」を買うということではないだろうか。それも自分の内なる世界で育む愛として。なぜなら誰でも人形を買うときは、その人形と何らかの関係を持つことを想定しているからだ。この関係性にこそ、人形の特殊性があるとは、人形つれづれの福島氏はじめ、多くの人が指摘するところである。その愛を人形を見る人に呼び起こさせるのが作者の心だ。その心が豊かで純粹で、強いものであれば、多くの人の心に訴えることになるだろう。すなわち、人形の作り手にとって求められることは、技術的な習熟は人手にわたることを考えれば良識の問題として当然のこととして、それ以上に心の豊かさ、精神世界の深みではないだろうか。

人形玩具学会のシンポジウムで人形美術研究家の渡辺純子さんは人の心を感動させるものがある種のエネルギーに置き換えて、エネルギーの循環論を試みた。四谷シモン氏は、今、日本で人形作家と呼ばれる人々の作品が、見る人に衝撃波を与えるほどの強いものを持っているかと問いただした。床の間に収まらない人形を目指す作家には特に傾聴すべき意見であろう。

心を磨くにはどうするか？難しいことで宗教的な領域に入りそうだが、簡単にいえばいかに深く愛せるか、ということなのかもしれない。この不可思議な感情は、人を動かすエネルギーの根元ともなる。真実の愛は憎悪や全ての否定的な感情さえも包括することができる。愛は求めるものではなく、与えるものである。こんな風に、愛や心をめぐって考えてしまったのは、人形の話聞きにうかがいながら四谷氏の人形に対する愛情の深さを強く感じたからだ。こう思っ、様々な人形を見るとまた見え方が変わってきた。

*本誌掲載に記事・写真の無断転載・複写を禁じます。

DOLL FORUM JAPAN 3-27-57 Kumegawa, Higashimurayama-shi, Tokyo 189 JAPAN tel 81-423-95-7547 fax 81-423-95-7975

ユーラシア・ドールズの
通信販売
好評発売中！

表記価格は送料を含みます。

ご注文は同封の注文用紙でどうぞ

遠い国・遠い人々

山口景子人形作品集

DFJ 2号の表紙となった山口景子初の写真集。ファラウェイランドなど32点を収録。

装置・撮影は夫君の山口力靖氏
フジアート出版 5800円

遠い国
遠い人々

山口景子人形作品集



CONTEMPORARY
ARTIST DOLLS
FROM GERMANY



by Ann Bahar and Ingeborg Riesser

ドイツのアーティスト・ドール

バリの・プベ・タンドレスのオーナーであり現代フランス人形作家クラブの主宰者であるマダム・インゲボルグ・リーセが編集。ショルツ、グンツェル、シュロット、ナテレールら欧米で人気の32人の作家の作品集。A4・192ページ、カラー多数
一般価格4500円
DFJ 会員4000円

EURASIA DOLLS

189 東京都東村山市久米川町3-27-57
tel 0423-95-7547 fax 0423-95-7975